

令和7年度〔2025年度〕

とうきょう すくわくプログラム活動報告書（境南保育園）

1. 活動のテーマ

〈テーマ〉

粗大遊び（ウレタン積み木）

〈テーマの設定理由〉

園の特色でもある広い園庭と毎日の生活や遊びの中で乳児期から感触遊び、粗大遊びを大事にしている。0歳児からの体づくり、歩行の確立、自分で自分を守る力となる粗大遊びをさらに深めるため。

2. 活動スケジュール

期限を設けず日頃より乳児期に大切な活動の取り組みの一つとして年間を通し行う。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

日常的に使って遊べる大きな段ボール箱、マット、ロールマットや計画的な活動に取り入れている体づくりとしてののさくら・さくらんぼリズム体操を基本におさえていく。

4. 探求活動の実践

〈活動内容〉

ロールマット：全身でよじ登ることや力を抜いて滑り降りる。

マット：ダイナミックな動き、衝撃などを防ぐため。

箱：高いところに登る、掴まって跨ぐ、入り込むなど怪我が少なく多様な使い方ができ、豊かな創造／想像力につながる。



☆ウレタン積み木がお部屋にやってきた！

指先まで、体全身を使って持ち運ぼうとする。



積み重ねたり、崩してみたりを繰り返す中で構成遊びが始まってきた。



5. 振り返り

〈振り返りによって得た先生の気づき〉

ウレタン積み木を室内の活動の場所に常設したことにより、一本橋や道路、電車などのみたて遊びや運んで上に乗ったりするなど、身近な道具・遊具として子どもたちが主体となって遊んでいく様子を知ることができた。

ウレタン積み木での遊びを通して足、腰、指先に力を入れて自分より大きいものを動かす活動を繰り返し楽しんできた。そのことにより、遊びの中で微細な動きやバランス感覚、粗大な動き（上下左右、様々な方向に体を動かす）を経験していくことができた。子どもたちの遊びの中に特別な玩具などではなく、これらを経験できる場が常にあることが大事なことだと思った。

令和7年度〔2025年度〕

とうきょう すくわくプログラム活動報告書（境南保育園）

1. 活動のテーマ

〈テーマ〉

感触遊び（築山）

〈テーマの設定理由〉

日々の遊びの中で乳児期から感触遊び、粗大遊びを大事にしている。その中で子どもたちが会える身近な感触や小さな気づきになる感触遊びをさらに深めるためにはどのように保育を進めていけるか探る。

2. 活動スケジュール

期限を設けず日頃より乳児期に大切な活動の取り組みの一つとして年間を通し行う。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

砂、水、泥、土、葉、氷などの身近な自然物と、季節の制作活動の中で使用する絵の具、クレヨン、シール、様々な素材。

4. 探求活動の実践

〈活動内容〉

4月～ 戸外遊びに慣れていないことから園庭遊びを通じて砂・水・泥んこ遊びをたくさん経験する。

日々の活動の中で様々な感触（クレヨン・氷・絵具等）を味わう。



12月～

築山が完成！



5. 振り返り

〈振り返りによって得た先生の気づき〉

一年を通して様々な感触遊び（砂・水・泥・氷・紙・絵具・クレヨン等）を重ねていく中で外界とかかわること、手や肌、全身を通してたくさんの刺激を受け、一人一人が快・不快はありながらも様々な感触に気づき、発見が生まれると感じた。砂遊びができない、苦手という子は近年増えている。また感触遊びを楽しめる環境が減っているからこそ、一人一人の思いに寄り添いながら、毎日の中で砂や土や様々なモノ、外界に触れていくことのできる環境を設定することはとても大切だと思えた。

砂地に手をつくことに苦手意識があった子も、築山に向かい、手をつくこと、登ることができるようになった。一年をかけて砂や土に触れる経験を重ね慣れ親しんできたからこそ、恐れることなく築山に手をつくことができたのだろう。それはその子にとって、これからにつながる大きな経験になったのだろうと感じた。

令和7年度〔2025年度〕

とうきょう すくわくプログラム活動報告書（境南保育園）

1. 活動のテーマ

〈テーマ〉

虫

〈テーマの設定理由〉

園庭でアリやダンゴムシと触れ合って遊ぶ中で、「お別れしたくない」という子どもの言葉から飼育が始まったが、虫を飼育する環境を整える中で、虫が好き、もっと知りたいという好奇心を育てていきたいと思った。インクルーシブ保育を実践する中で、どの子どもも虫と親しめる、虫のつもりになって子ども同士が関わりあえる環境を作っていきたいと考えたため。

2. 活動スケジュール

期限を設けず季節の移り変わりを感じながら、クラスの大切な活動の取り組みの一つとして年間通して行った。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

大型ビーズクッションマット…屋上テラスや室内にてクッションマットの上で横になったり体を動かし、虫のつもりになった。

ティエ（マジックテープ付き大型パネルマット）…子どもたちの発想をもとに工夫しながら空間を作り、ごっこあそびなどに活用した。

ネイチャーシェード…屋上テラスに遮光性を活かし、森の中にいるかのような空間を生み出した。

安全ノンスリップクッションマット…屋上テラスに滑りにくく安全性を重視したマットを敷いた。

4. 探求活動の実践

〈活動内容〉飼育・制作 戸外や保育室内での表現あそび

〈活動中の子どものすがた、声、子ども同士や保育者との関わり〉

4月～

園庭あそびの中で自然に虫と触れ合っていた子どもたち。ある日いつもよりたくさん捕まえた虫を砂場のバケツに入れ、愛おしそうに過ごしていた子がいた。お片付けの時間になり「アリさんたちとバイバイしようか」と保育者が声をかけると「バイバイしたくない」と泣き出す。「どうする？」と子どもたちと相談する中で虫かごに入れて飼育してみようという流れになった。数日にわたり園庭に出るたびに虫かごを持っていき、クラスの子どもたちそれぞれが時折触れ合ったり、またかごに戻し様子を観察したりしていた。保育室では土が乾くと霧吹きで水をかけたり、はっぱを入れ替えたりしながら虫と触れ合い過ごすようになった。

5・6月～

チョウが描かれた服を着た子が登園し、保育者や友だちと「かわいいね！」と盛り上がっていたところ「チョウチョになりたい」という声が挙がってきた。制作でチョウのペープサートを作ってごっこ遊びをしたり、散歩先の公園に持っていき本物のチョウを見つけ、同じように羽ばたく真似をしていた。また「ハチになりたい」と背中に画用紙で作った羽をつけて、ハチになりきっておやつを食べるなど、この遊びは数人からグループの子どもたちへ広がっていき、生活と遊びのなかで楽しむようになっていった。子どもたちの興味関心に合わせ、クラスの絵本棚に「虫がテーマとなっている絵本」や「図鑑」なども置き、自由にみられる環境を設定した。「みてみて！」「こんな形になっているよ」「ここはどうなっているんだろうね」といったやり取りも日常的に生まれた。

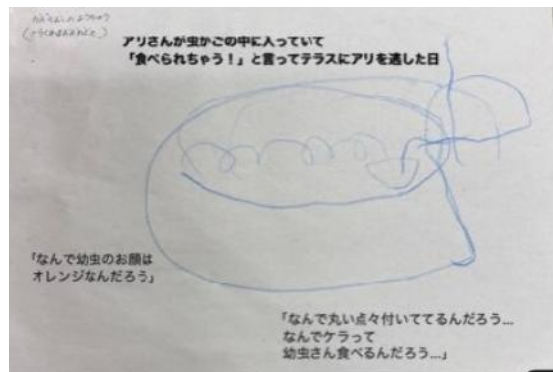


夏

アゲハチョウの幼虫を園で飼い始め、数日観察しているとサナギになりチョウへと羽化した。その過程を観察する中で図鑑と見比べたり、心配したり、愛着を深めた子どもたち。チョウになって空へ放つときには「さびしい」というつぶやきもあり、チョウへの思いが深まっているのが感じられた。

秋

運動会の取り組みにおいて、子どもたちが虫のつもりになって、虫のイメージで探検する内容で、日頃つけてきた体育的な力を発揮できるようにした。また親子種目は「昆虫太極拳」の体操で親子で虫の修行を楽しみながら身体を動かし、子どもたちが日常の保育の中で楽しんでいるものを共有できた。弁当持ち散歩では、散歩から帰った後2階テラスでお弁当を食べた。「安全ノンスリップクッションマット」の上に各自のレジャーシートを敷き、「ネイチャーシェード」で森の中にいるような気分を味わいながら食事を楽しむことができた。



冬

室内やテラスに「大型ビーズクッションマット」を置き、虫のつもりでゴロゴロと横になったり、「ティエ」でクモの巣のような家を作ってごっこ遊びを楽しむことができた。みんなでゴロゴロとリラックスしたり、虫のつもりになってごっこ遊びを展開したり、クラスの子どもたちみんなが一緒に寝転んで自然なふれあい遊びを楽しむこともでき、今後も活用の幅が広がっていくことが予想された。



5. 振り返り

〈振り返りによって得た先生の気づき〉

日常のなかで子どもたちは色々なものに興味関心を持ち、主体性や意欲など自分自身の幅を広げていく。乳児と幼児の発達過程を行ったり来たりしながら成長する3歳児クラスでは今回の取り組みを通じ、子どもたちにとって身近な虫を自分に重ねて可愛がったり、心配したりしている姿から命あるものを大切にする経験につながっていた。チョウやアリの飼育から虫を身近に触れられたことで関心を深めたり探求の芽が出て伸びていくのを感じている。そこに環境をデザインし、イメージが深まるような働きかけをすることで遊びがより豊かになっていった。特にごっこ遊びでは虫の気持ちになって気持ちよく飛ぶような動きをしたり、友だちとやり取りをする中に虫のイメージが入ることで新たなエッセンスとなっている。図鑑や絵本などで知識として身につけたことをごっこ遊びのなかで再現する姿があり、探求活動の一端であると感じた。今後4・5歳児クラスへと成長していく中で、さらなる探求の深まりが見られそうだ。また、誰もが楽しめる環境を心がけたり、イメージが深まるよう子どもたちと一緒につくってきたことで今、適した環境の中で子ども同士のつながりがより深まっており、今回のとうきょうすくわくプログラムに参加できてよかったと感じている。